

エミールさん（インドネシア）

ゆっくりと、でも確実に迫りくる脅威

私はインドネシアのジャワ海に面するバンドゥンガン村で暮らしています。稲作とジャスミン栽培が盛んな小さな村です。

しかし、2008年頃から急速に海水の浸水範囲が広がり始めました。まず畑のあたりから浸水が始まり、それから道や通りへと広がっていきました。それは毎日続き、とうとう家の中まで浸水しました。水位は時に屋内で 50cm まで達しました。



家や通りには汚水の混ざった海水が侵入し、皮膚病や下痢などの感染症も蔓延しています。村の住民は、家の*を毎年 50cm ずつ上げています。

米農家をやめて、魚の養殖業へ

私は米農家として、稲作農業を行ってきました。しかし、2008年頃から急速に海水の浸水範囲が広がり、2011年に水田の 5 割が浸水しました。2013年には、全ての水田が水没しました。おかげで、水田は一切使い物にならなくなりました。

仕方がなく、浸水した水田を魚の養殖池に転換しました。しかし、水かさが増え続けたことで、魚が網の上から逃げ、養殖に失敗しました。そこで、現在は魚や海藻の養殖を組み合わせやりくりしています。海藻の収入で、何とか今までの被害をカバーできればと願っています。

もうどうにもならない

地方政府からは、浸水によって衛生環境が悪化しているため、地域住民自ら、

ごみを減らし、スラム地区や下水の管理をしていくよう言われています。浸水の被害を抑えるために海岸沿いでマングローブ**の植林などをしています。でも、気候変動の影響を軽減するには、地方政府だけではどうにもなりません。

市は地域住民に対して、浸水への「適応」の努力をするよう促していますが、「損失」と「被害」から立ち直るには十分とはいえません。たった数年で、生計手段も健康な生活も、そして農村文化も失われたのです。この村が生き残っていくためには、防波堤や堤防を建設し水を抑えたりするような対策だけでは、もうどうにもならないというのが実感です。

*床高…直下の地面、あるいは基準とする地盤面から床の上面までの高さ。

**マングローブ…海水と淡水が混ざり合う水域に生える植物の森。

出典：認定 NPO 法人 FoE Japan

※本エピソードは、インドネシアに住む地域住民のエピソードをもとに作成しました。名前・イラストは、架空のものです。

カマラさん（スリランカ）

田んぼから水が消えた

雨が降らなくなって2年経ちます。農家は大変です。畜産農家は牛や豚などの家畜にやる水が無いと嘆いています。

干ばつによって、多くの畑が被害を受けました。過去と比べての今年の干ばつは特にひどいです。雨期*なのに干ばつが起きているのです。

とにかく自分たちの飲み水さえ無く、給水タンク車からもらっています。農業を営んでささやかに暮らすということさえ、水不足のせいでできないのです。でも政府の支援は全くありませんでした。水タンクとジャガイモ 4kg の支給があっただけです。米や乾物の配給があったところもあると聞きましたが、ここではなかったですね。



人々に迫る危機

今は水不足ですが、一旦雨が降り始めると今度は止まないのです。台風や洪水はひどくなっていて、1 か月降り続いたりします。そして人々は病気になっています。新型の病気が広がっています。

きれいな水が生活に必要です。でも今じゃ、水の値段も上がっていて、人々は困難に直面しています。

私たちの声は大国に届いているだろうか？

地球や人材や環境はいくつかの大国**のためだけにあるのではない。ここで

は皆とてつもなく困難な暮らしをしています。それなのに、大国の人々は月や他の星に到達するほど進歩しています。

自然環境からの影響によって、人類は滅びるでしょう。意味のない無駄な巨大建設事業は停止されるべきです。大国は破壊の規模を最小限に抑えるべきです。そうなれば、私たち小国の人間にも成長するチャンスが来るかもしれません。

* 雨期…ある地域でおよそ1か月にわたって雨量の多くなる期間のこと。

**大国…国際的に影響力をもつ国々。

出典：認定 NPO 法人 FoE Japan

※本エピソードは、スリランカに住む地域住民のエピソードをもとに作成しました。名前・イラストは、架空のもので

す。

マリアさん（フィリピン）

まさか海から大波が来るなんて

2013年11月に巨大台風ヨランダ（フィリピン名、日本では台風30号）がフィリピンを襲いました。ヨランダが横断したフィリピン中部地方は、強風と局地的な低気圧による高潮*のため、甚大な被害が出ました。中でも私が住むレイテ島の中心都市タクロバンは、港の最も奥にあったので高潮が最大6メートルにもなり、沿岸部は全て大波にのまれてきました。



あの日は朝4時くらいから雨が降っていました。嵐の前日のような強い風が吹いていました。6時になると海の水位が上がってきました。避難先の学校から丘の方に行こうとしたけど、水かさがどんどん増してきたので着けませんでした。胸の高さまで水が来て、もうすぐ死ぬんだと思いました。動物が溺れているのが見えました、豚や鶏が。私と家族は二階建ての家や高いココナツの木に登って生き残りました。今も風が怖いです。

私たち本当に復興したかしら？

私の夫は漁師ですが、台風のせいで漁場が破壊されたのか、漁獲量が減りました。家は完全に壊れたので、道端に仮設住居を建ててしばらく滞在していて、今後復興住宅に移る予定です。生活を立て直すにはお金が必要ですが、政府による支援はほとんどなく、国際NGOの支援に頼っています。政府は防潮堤をつくろうとしています。被災者は遠くに移住させられるでしょう。漁業が続けられなくなったら、私たちの生活はいったいどうなるのでしょうか。政府はテレビで「全て日常に戻った」と言っています。私たち本当に復興したかしら

ら？

気候変動は人間のせいだ

気候変動と台風は深く関わっています。以前は台風はこんなに強くなかったし、高潮なんてありませんでした。これまで生きてきて初めて「高潮」という言葉を知ったのです。また、以前は耐えられる程度の暑さだったのが、今はものすごい暑さになって、乾燥して地面にヒビが入るのです。私がこの状況で思うのは、気候変動は人間のせいだということです。

*高潮…台風や発達した低気圧が海岸部を通過する際に生じる海面の高まり。

出典：認定NPO法人FoE Japan

※本エピソードは、フィリピンに住む地域住民のエピソードをもとに作成しました。名前・イラストは、架空のもので

す。

小林 加菜さん（日本）

私は都内の私立大学の3年生で、生態学を専攻しており、生物多様性や生態系の仕組み、野生動物との共生共存を勉強しています。「Fridays For Future Japan」という、気候変動による危機を訴えるムーブメントの発起人のひとりです。



気候変動は命の危機に関わる

幼いころは両親がゲームを買ってくれなかったので、外で遊ぶというオプションしかなかったです（笑）。木登りしたり、ローラーブレードをしたり。田舎に住んでいたわけではなかったけど、自然との距離は近かったです。

気候変動に関心を持った明確なきっかけは覚えていなくて。でも小さいころから、父が環境や貧困などの社会問題を教えていて、いつしか自分の中で環境保全をやりたいという漠然とした思いが湧いてきたんです。

今までは危機感とか感じてなかったんですけど、去年（2018年）の夏は猛暑日や熱帯夜が続いたりして。場所によっては外出禁止令がでるほどの暑さの中、日本中の人々が熱中症で運ばれていることを知ったとき、気候変動は本当に命の危機に関わることなんだなって、身にしみて感じました。

若いからこそできることがある

2018年8月にスウェーデン出身のグレタ・トゥーンベリさん（当時15歳）が、気候変動への危機感を胸に国会前でひとりぼっちのストライキを行いました。彼女の活動はSNSで瞬く間に広がり、現在は40か国以上の国の若者が毎

週金曜日に学校を休んで「Fridays For Future」というムーブメントに参加しています。

私は彼女のスピーチを見て、自分より年下の子が行動していたことに衝撃を受けました。私もグレタさんと同じように気候変動の脅威には焦りを感じていたし、「そう思ったなら私もやらなきゃ！」という風に思いたって「Fridays For Future Japan」を始めました。

やっぱり、世界では「おとな」でなく若者たちが動いているわけで。私は先進国に生きてきて、何不自由なく豊かに生活しているけど、そんな生活の裏で気候変動の影響を受けて苦しんでいる人がいるってこともずっと前から分かっていたんです。先進国の日本こそ、気候変動に対して動くべきじゃないかと思います。なおかつ、未来を担っているのは私たち。若い世代が動き出すことはとっても大事なことだと思います。

出典 <http://spiral-club.com/fridays-for-future-japan/>

※本エピソードの登場人物の名前・イラストは、架空のものです。

